

「小僧の神様」の小僧は、なぜ「はかり屋の小僧」か

松本, 常彦
九州大学大学院比較社会文化研究院教授

<https://doi.org/10.15017/8496>

出版情報：九大日文．7，pp.20-35，2006-04-30．九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

「小僧の神様」の小僧は、 なぜ「はかり屋の小僧」か

MATSUMOTO Tsunehiko
松本 常彦

「小僧の神様」(「白樺」大9・1)は志賀直哉にとつて雑誌「白樺」に掲載した作品としては最後のものになる。そうしたことも手伝つてか、「創作余談」(「改造」昭3・2)において作者は小説への愛着をストレートに表明している。

屋台のすし屋に小僧が入つて来て一度持つたすしを皿をい
はれ又置いて出て行く、これだけが実際自分が其場に居あ
はせて見た事である。此短篇には愛着を持つてゐる。

この発言は、「小僧の神様」が『荒絹』(春陽堂、大10・2)、『壽々』(改造社、大11・4)、『真鶴』(新しき村出版部、大13・3)、増補版『夜の光』(新潮社、昭4・2)などに再録されたことによつても裏打ちされる。自作に愛着を感じるのには小説に限らず一般的である。それを表明するかどうかは人それぞれだが、好き嫌いを明白にする志賀の特色は、「創作余談」などの自作評でも同じであつて、愛着の語を用いるのも一種の常套でもある。「小僧の神様」の前後でも、「雪の日」(「読売新聞」大9・2・23、26)の「我孫子生活の憶ひ出として愛着は持つてゐる」(「創作余談」という評、また「焚火」(「改造」大9・4)の「書いた時には如

何にも書き足りない気がして止めて了つた。(略)今では自分でも好きなものの一つになつてゐる」(「創作余談」)などの発言がある。この傾向は「続創作余談」(「改造」昭13・6)でも変わらず、若干の例を引くと、「山科の記憶」(「改造」大15・1)と「痴情」(同、大15・4)について「今も或る愛着を持つてゐる」と、「プラトニック・ラヴ」(「中央公論」大15・4)について「淡ひ味ひに多少の愛着を持つてゐる」と、「邦子」(「文藝春秋」昭2・10)について「私自身では自分のものとして、「これも亦一つのもの」として愛着を持つ」と、「雪の遠足」(「婦世界」昭4・1)について「書いた時は甚だ不出来のやうに思はれ、興味を持たなかつたが、近頃は或る程度の愛着を感じてゐる」と語るなど、例を挙げるのに困らない。その点では「小僧の神様」の例もけつして特異ではなく、それだけでたちに何らかの積極的な意義がもたらされるといふのではない。ただし志賀は愛着のみを語つたわけではない。一方では「過去」(「女性」大15・10)への「作品としても、記憶としても好きなものではない」(「続創作余談」)、「くもり日」(「新潮」昭2・1)への「陰気臭い感じで、これも好きでない」(「続創作余談」)など逆向きの発言もある。また、愛着の理由も作品ごとに微妙に異なり、小説の内容と自解の言とを照らし合わせるなら、そこに種々の含意があることが窺われるのだが、「小僧の神様」の場合、きわめて端的で率直な表現になつてゐる。それによつて愛着の強さは推し量れるものの、その一方で逆に愛着の理由や由来が蔽われる一面もある。好きなものは好きと聞けば十分で、その理由をあれこれ詮

索することは一般には野暮である。のみならず、その結果も、おおよそ徒勞に似ることを承知した上で、愛着の語にこだわる理由は二つほどある。一つには、愛着という評を手がかりに、そうした評のある作品を貫いて何らかの通用性を見ることができるとはならないかという期待である。この小稿でその期待を満たすことは無理であるが、そのきっかけにでもなればと考える。もう一つには、「小僧の神様」への愛着は、作者が「其場に居あはせて見た事」そのもの、つまり「屋台のすし屋に小僧が入つて来て一度持つたすしを皿をいはれ又置いて出て行く、これだけ」に由来するとは考えにくく、その愛着は多分に「これだけ」の素材が小説に生成していく過程と深く関わっていると推測されるからである。

作者の言う事実は、それだけを取り出せば、むしろ愛着とは遠い無残な出来事である。「皿をいはれ」て出ていった小僧の姿に接して「何だか可哀想」と思い、続けて「どうかしてやりたい」と思うのは人情の自然であろう。その人情は尊いとしても、それを引きおこす出来事自体に愛着があるとは思えない。まして、その場で「どうかして」やるのが「冷汗もの」と感じる人物であれば、なおさらである。「御馳走」をすることが「冷汗もの」であり、ふとした偶然から、それを実行した後も「変に淋しい、いやな気持」になる心のはたらきを見つめる作者にとつて、その場で「どうかして」やれなかつた代償を小説で果たしたから愛着が生じたというでも、つじつまはあうまい。いずれにせよ、作者の愛着が「見た事」をもとに小説を作

るときの虚構の様相や方向と深く関わることはまぎれもない。

作者の言うことを信じるなら、全十章からなる「小僧の神様」の中で見聞にもとづくのは第三章のみになる。その前の第一、第二章も、その後が続く第四章から第十章にかけても、作者の想像がつむぎあげた虚構（描写や設定）ということになる。「見た事」と重なる第三章を種子として、虚構の根がのび枝葉がついていった按配だが、第三章の前と後とは、その虚構のありように違いがある。というのも、志賀が「屋台のすし屋」で作中の「若い貴族院議員のA」と同じような体験をしている以上、それを契機として導かれる心のはたらきは、純然たる虚構というより、作者自身のもうひとつの体験とも見なし得るからである。「皿をいはれ又置いて出て行く」小僧を見た作者ならぬAの心の行方にもつわる表現をたどると次のようになる（最初の丸括弧は論者の注記）。

- 1 「何だか可哀想だつた。どうかしてやりたいやうな気がした」（四章）
- 2 「だからといって、それを実行すると」「此方こちが冷汗あせものだ」（同）
- 3 「兎も角さう云ふ勇氣は一寸出せない。（略）他所よそで御馳走するなら、またやれるかも知れないが」（同）
- 4 （偶然に小僧と再会し「他所で御馳走する」機会に直面して）「名を知らしてから御馳走するのは同様如何にも冷汗の気がした」（五章）
- 5 （名と住所を）まかして小僧を鮎屋に残して出てきた後）「小僧に

別れると追ひかけられるやうな気持」(七章)

6 「変に淋しい気がした。自分は先の日(略)心から同情した。そして、出来る事なら、かうもしてやりたいと考へて居た事を今日は偶然の機会から遂行出来たのである。

(略)自分は当然、或喜びを感じていいわけだ。所が、どうだらう、此変に淋しい、いやな気持は。何故だらう。何から来るのだらう。丁度それは人知れず悪い事をした後の気持に似通つて居る」(同)

7 「自分のした事が善事だと云ふ変な意識があつて、それを本統の心から批判され、裏切られ、嘲られて居るのが、かうした淋しい感じで感ぜられるのかしら？」(同)

8 「もう少し仕た事を小さく、気楽に考へてゐれば何でもないのである。自分は知らず、こたはつて居るのだ。」(同)

9 「然し兎に角恥づべき事を行つたといふのではない。少なくとも不快な感じで残らなくてもよささうなものだ」(同)

10 「変な淋しい気持はBと会ひ、Y夫人の力強い独唱を聴いて居る内に殆ど直つて了つた」(同)

11 (淋しい気持が直つた後で妻に)「変に淋しい気持になつた事などを話した」(同)

12 (妻の自問自答)「何故でせう。そんな淋しいお気になるの、不思議ネ」「さう云ふ事ありますわ。何でだか、そんな事あつたやうに思ふわ」「本統にさう云ふ事あるわ」(同)

13 「淋しい変な感じは日と共に跡方なく消えて了つた。」(九章)

14 (しかし小僧の店の前を通るのは)「気がさして出来なくなつた。のみならず、其鮎屋にも出掛ける気はしなくなつた」(同)

15 (笑いながら、その鮎を取ればという細君に)「Aは笑ひもせず、に、「俺のやうな気の小さい人間は全く軽々しくそんな事をするものぢあ、ないよ」と云つた」(同)

右の分けかたは便宜にすぎない。確認したいのは次の点である。Aは作者と同じような場面に遭遇し、そこでは作者と同じように何もしない。そのAの気持ちは、「可哀想」だから「どうかしてやりたい」が、実行に移すのは「冷汗もの」で、その「勇氣は一寸出せない」が、それは基本的に実体験が誘発した作者の内省と通じるのではなからうか。その後の作者にはAと同様の偶然はなかつたようだが、もしAと同じような機会を得て「他所で御馳走するなら、まだやれるかも知れない」という可能性を実行すればどうなるか。そのときに一番しつくりとくる心の動きをシミュレートしたものが4から15の文脈になる。小僧への御馳走が作者の現実ではない以上、それも虚構といへば虚構に違いないが、作者にとつて落ちつくべきところに落ちつく「本統」の気持ちや一番しつくりくる心の動きを追求する点では、あたかも生身の作者の心の動きを写したかのような写実の性格が濃い。笑顔を向ける細君に対して「笑ひもせず」に、「俺のやうな気の小さい人間は全く軽々しくそんな事をするものぢ

あ、ない」と語るAの発言は、「冷汗ものだ」「さう云ふ勇氣は一寸出せない」という発言の再確認であり、「他所で御馳走するなら、まだやれるかも知れない」という可能性が、偶然としてはともかく、気持ちの上では意志的な選択として再び閉ざされたことを示している。第四章以降のAの気持ちのはたらきを中心とした記述は、自由な想像が次の想像を産むといった虚構化の営みではなく、「冷汗もの」のふるまいを実行してしまつた後の心の必然的な道筋をたどり、落ち着くべき極所に向けて求心的に進む内面の写真になつてゐる。それはシミユレーションであつても、むしろ他の種々の可能性を削ぎ落としていくようなそれである。

もつとも、第四章以降には先の1から15のような文脈のみならず、Aと仙吉（小僧）との再会（第五章）、鮪屋での仙吉の様子（第六章）、鮪屋から帰るときの仙吉の想像（第八章）、「あの客」（A）に対する仙吉の思い（第十章）なども描かれている。そのうち第五章のAと仙吉（小僧）との再会の場面は、仙吉の奉公先が「秤屋」として設定されている第一章を受けているので、基本的には、第一、第二章の設定の問題として問うことができる。それ以外は基本的に仙吉の内面や人物像が問題になる。第一、第二章の設定がただちに第四章以降の仙吉の内面や人物像を説明するというまでの呼应関係にあるわけではない。たとえば仙吉が「秤屋」の小僧であることと第八章や第十章の仙吉の内面描写とが関係するのかどうか、にわかには断定できない。それは無関係にも見える。しかし、仙吉をどういう人間として描くか

という問題が、仙吉の奉公先や境遇を描く第一、第二章で先取りされていたことは十分に推測される。その点では、これも第一、第二章の設定の問題として問うことが許されるだろう。

必然の道筋をたどる第四章以降の文脈とは対照的に、「神田の或秤屋の店」の様子を描いた第一章、「電車の往復代」のうち「片道」を節約して「番頭」たちの話に出てきた鮪屋と「同じ名の暖簾を掛けた鮪屋のある事を発見」したために屋台に飛び込む小僧を描いた第二章は、文字通りのシミユレーションの試みだつたような印象がある。それは「価をいはれ又置いて出て行く」はめになつた小僧に向けて、つまり第三章の光景に向けて、多くのありそうな可能性を可能性の方向で検討し、その中から任意の一つを選ぶ作業である。小僧は「或秤屋」でなくとも、呉服屋、本屋、文具屋の小僧、あるいは大工や左官の職人見習いであつたとしても、第三章のような不幸に出会い、第四章以降の僥倖に遭遇して不思議でない。屋台に飛び込むきっかけなども「同じ名の暖簾を掛けた鮪屋のある事を発見」したというに限るまい。その点、第一、第二章の設定は可変的な性格を持つように思われる。

第一、第二章あるいは第五章の虚構化が可變的に見え、第四章以降の「可哀想」から「そんな事をするものぢあ、ない」に到る文脈が、それとは逆の必然性を帯びているように見えることは、「小僧の神様」論の動向と関わっている。たとえば山口直孝『小僧の神様』論—Aと仙吉との関係をめぐつて—（『日本文藝研究』平7・9）は「これまでの研究は「変に淋しい、いやな

「気持」(七)の解明に比重を置き、出発点を問題にすることは殆どなかった」と述べていたし、近くは頓野綾子『小僧の神様』—その「残酷な関係」(『中央大学國文』平15・3)に「従来この物語は、Aの内面を探る、という点を中心に読まれてきた」という発言がある。数の上からいえば、現在では、山口論や頓野論を含め、第一、第二章の設定を問題にした論は「殆どなかった」というほど少ないわけではない。「小僧の神様」に関する研究史の上でも、今後の課題としては、作者の体験に重なる第三章を中心として、第一、第二章の設定と第四章以降の文脈との有機的関連を検討することが必要であると思われる。

有機的関連という語を用いたのは、第三章の前と後との落差について、「相当程度の致命的な破綻」を指摘した紅野敏郎「志賀直哉・鑑賞」(『鑑賞と研究・現代日本文学講座 小説4』三省堂、昭37・3)のような意見もあるからである。紅野は、小僧が「二銭の不足で、むなしくうちのめされて引きさがっていく、そのあたりのところまでは、たしかに迫真的な描写で書きすすめられてきた」が、「Aの登場」以後の文脈は、その「変な寂寥感の分析に力が注がれ、同時に仙吉の形象はいちじるしく色あせてしまい、たちまち、影の薄い存在になってしまふ」と述べている。紅野論を引いたのは、「致命的な破綻」をそのまま是認しようとするからではない。なるほど同論は有機的な関連を認めない代表例になっているが、その一方で紅野の意見には、第三章の前と後とをどう捉えるかという問題提起が含まれていた。紅野論の是非については、面と向かつての反論は少ないも

の、その後の研究史を見れば異論も多いことになるのだろうが、上記の点で、なお再考すべき指摘になっている。

小説の第一、第二章の設定と小説の後半との関係を考える上で、紅野謙介「隔差をめぐるファルス—志賀直哉の短編を読む」(『月刊国語教育』平2・9)は、興味深い指摘を行っている。仙吉の奉公先が「秤屋」である「必要があったのか」と問い、その「筋の展開の中で「秤屋」である必然性はとくにない」と述べた上で、「はかる」という行為自体のなかに、ヒントが隠されている可能性があり、「この小説では「はかる」ことは思いの外、大事な役割を果たしている」と述べる。この文章は、「小説をどう読むか」という「連載講座」の一回であるという性格もあって、以上の指摘がそれ以上具体的に検討されることはないのだが、前掲の山口論や頓野論および次に引用する林廣親「志賀直哉「小僧の神様」を読む」(『成蹊国文』平11・3)がいずれも引用するように、小説前半の「小僧」と「秤屋」という設定を考える上で重要な示唆を含んでいた。林は、「秤屋」という業種に言及した町田栄「志賀直哉『小僧の神様』」(『国文学』昭59・3)を参照しつつ、「はかる」ことの意義に注目した紅野の指摘の重要性を認めた上で、ただし、その意義は紅野が示唆するようなAと小僧との「隔差」にかかわるのでなく、「(他者)の生の行方の不可知性というアポリア」つまり「はかる」ことの困難さと関係すると述べる。紅野の発言の意図がストレートに「隔差」を意味しているかどうかは曖昧なので、林が言うような差異があるのかどうかも実は不明なのだが、ともかく、紅野

の指摘の可能性を検討し直すことが、小説全体の有機的な関係を
を見直すことになることは確かであるように思われる。それは、
従来、多くの論で焦点になってきたAの「淋しい気持」と不可
避的に結びつくような可能性として「秤屋」の「小僧」の「仙
吉」を考えるということになるだろう。先行論文の驥尾に付し
て、その可能性を以下で検討してみたい。

「秤屋」の小僧という設定が、第四章以降のAの気持の文
脈と同じような意味で必然的だったとは考えにくい。最初から
「秤屋」の小僧でなければならぬ、そうでなければしっくり
こないということは考えにくい。しかし、任意の多くの可能性
やシミュレーションの中から、現実には「秤屋」が選ばれたの
であり、そこには相応の理由や根拠があったと考えられる。そ
の点では、「秤屋」の小僧という設定にも一種の必然性がある。
たしかに、「秤屋」の小僧が「呉服屋」の小僧でも、第四章以
降のAの気持ちをたどる文脈や御馳走をもらった小僧の描
き方に本質的な変更が生じるようには思えない。そのときどう
しても変更しなければならぬのは、わずかに次の部分だけで
ある。

Aは幼稚園に通つて居る自分の小さい子供が段々大き
くなつて行くのを数の上で知りたい気持から、風呂場へ
小さな体量秤を備へつける事を思ひついた。そして或日彼
は偶然神田の仙吉の居る店へやつて来た。(略)店の横の奥
へ通する三和土になつた所に七つ八つ大きいから小さい

のまで荷物秤が順に並んでゐる。(第五章冒頭)

右の引用以外にも秤にまつわる表現は数箇所あるが、それら
は秤でなければならぬという性格のものではない。たとえば
「秤を買ふ時(略)買手の住所姓名を書いて渡さねばならぬ」
という一文などは、小説末尾の小僧が「番頭に番地と名前を教
へて貰つて」云々と連絡する仕掛けにもなっているが、「住所
姓名」の筆記は「秤」に限らず、修理や修繕や不良品の返品な
どが必要な他の品物でも同じような場面を用意することは可能
であろう。したがつて「秤屋」という設定にとつて不可分の呼
応関係にあり、その設定が変更されたとき決定的な変更を迫ら
れるのは、右の引用の中でも「小さい子供が段々大きくなつて
行くのを数の上で知りたい気持」という表現、さらにその気持
のシンボルとも言ふべき「体量秤」という表現に集約される。
可変的な選択の可能性の中から「秤屋」の小僧が選ばれた理由
は、この句および語との関係において考えられるべきだろう。

ところで「秤屋」という設定があつたから、「小さい子供が
段々大きくなつて行くのを数の上で知りたい気持」という表現
が用意されたのか、それとも逆に、「小さい子供が段々大きく
なつて行くのを数の上で知りたい気持」を表現する必要から「秤
屋」という設定になつたのか、そのいずれであろう。一見どち
らでもいいように見えるが、前と後とは、その設定の意義が
違つてしまう。前者なら、ともかく任意に「秤屋」が選ばれ、
その結果として「小さい子供が段々大きくなつて行くのを数の
上で知りたい気持」が導かれるのだから、第五章や第七章の秤

をめぐるとは小説にとつて傍系的な挿話に過ぎなくなる。後者であれば、「小さい子供が段々大きくなつて行く」云々の句は最初から小説のひとつの根として発想されていて、そのために「秤屋」が要請されたことになる。つまり、「秤屋」は他と代わつてもかまわない代替可能な任意の設定ではなく、小説にとつて、ある種の必然的な設定ということになる。

小僧の奉公先をあれこれ考える中で、秤屋については前引の町田論でも言及があるが、すんなりと発想されるほど一般的な商いだったのであろうか。どうも、そういう気はしない。明治十三年七月出版の『東京商人録』（編輯兼出版人・横山錦樞）を見ると、権衡商之部には日本橋区本町と浅草区田原町の二軒のみである。「自動車」や「辻自動車」が出る小説の時代設定は、同時代の大正半ばと考えられ、そのまま適用するわけにはいかないが、小僧の奉公先として任意に選ぶには、やはりすぐに連想されるような商店ではあるまい。たとえば「小僧の神様」以外に秤屋を描いた小説として我々は何を想い出すことができるだろう。小泉袈裟勝『秤』（法政大学出版局、昭57・11）は、税や貨幣や貴金属や土地なども密接に関係する秤が「その性質上権力の下できびしく管理され、また貨幣と結びついて庶民と特別な関係で結びついてきた歴史」（あとがき）を通史的に検証するが、明治八年公布の「度量衡取締条例」が「本来公器で政府が供給すべきものを、民間人に請負わせるという形式の「思想」で「度量衡三器の製作及び販売の業」を律していたことを指摘する。そのため度量衡器の「製作及び販売の業」には官に

よる過酷な検査があり、「市民は度量衡器の不足に苦しむ」一方で、「国民の度量衡に対する畏怖感長く消えないものになつてしまつた」と述べ、明治から大正にかけての業界の動向を次のように概括する。

多額の身元保証金を積んだ免許販売人は、嚴重な官の取締りを背景に地方の有力な士となつていった。そしてこれらが明治二十七年設立される「大日本度量衡会」の会員となつて、いわゆる度量衡社会が結成され大きな政治力を發揮することになる。大正一〇年に始まるメートル法運動の推進力となり、戦後のメートル法を完成させたのも、この団体の後身日本度量衡会及び日本計量協会である。

「大正一〇年に始まるメートル法運動」と小説の間に何らかの因果があるのかどうか、あるいは、「度量衡社会」の「大きな政治力」と「貴族院議員」という設定との間に因果があるのかどうかなども気になるところである。「大日本度量衡会雑誌」から「計量会」に至る度量衡関係の雑誌を調べると、「神田の或秤屋」や「京橋」にある「同業の店」の特定および「秤屋」が置かれていた「政治」的地位などについても手がかりが得られそうだが、ここではひとまず秤屋の設定が任意としては特異であり、その特異さから、小説との関係を一考するに価することを確認すれば足りる。

どういふ商売にもその商売なりの特色があるとはいへ、「秤屋」という設定の選択は、「小さい子供が段々大きくなつて行くのを数の上で知りたい気持」や「体量秤」といつた要素を小

説に刻印する必要と不可分に結びついていると考える方が無難なのではなからうか。すなわち、「秤」にからむ話柄は、たまたま「秤屋」が選ばれたことによる傍系的挿話などではなく、そもそも小説にとつて最初から必要な要素だったのではあるまいか。もし、そうなら、「小さい子供が段々大きくなつて行くのを数の上で知りたい気持」あるいは「秤」は、小説を開くための鍵の役割を担っている。ただし、だからといって「子供」と「小僧」がまったく同義というようには考えていけない。それについては前引の紅野謙介論にも「子供ではあるけれど、決して無邪気で無垢な「子供」たりえない、労働者」という指摘もあったが、いずれ後述するとして、以下、「秤」という鍵を小説の鍵穴にさしこんでみたい。

第一章で語られるのは、「番頭」と「若い番頭」の間の鮪と鮨屋の名前をめぐる話である。そして小説の冒頭は次の一文ではじまる。

仙吉せんきちは神田の或秤屋はかりの店に奉公して居る。

作者は「仙吉」という名前を記すことから小説をはじめめる。

仙吉の「神様」が登場する第三章冒頭が「若い貴族院議員のA」云々となつていことから見ても、小僧に名前を与えるについては、名前を与えるかどうかを含めて、これも一種のシミュレーションを経たはずだが、なぜ作者は仙吉という名を選び、それを与えたのであろうか。小僧を指す表現としては「仙吉」と「小僧」と「彼」の三つがあり、その使い分けは語りの視点の

問題として論じられている。仙吉とAについても、その非対称性が解釈の対象になつていいる。しかし「仙吉」はAという記号に対応するほど十分に固有名の資格を持つのだろうか。また「仙吉」に対比すべきはAのみだろうか。というのも、仙吉は小僧だからである。大正十四年に神田の伊勢丹呉服店の小僧（丈ど）となつた安田丈一『丁稚の知恵袋』（文化出版局、昭56・11）は、三越の前身である越後屋の徒弟制度が「子供」から「大元締」まで十五段階あつたと記し、立命館大学人文科学研究所編「家事」を引用する。

親戚、旧徒弟、取引先等の縁故を通じて、十歳をすぎた位で、親元、宿元の身元保証のもとに丁稚入すると、七、八年間の丁稚生活がはじまる。最初は主人のお供、子守、家業の雑用に使われ、しだいに店の仕事を仰せつかる。名前も本名でよばれず、亀次郎は亀吉どん、長助は長吉どんになる。封建的な主従関係のもとで起居始終にわたつて厳格な干渉をうけ、禁酒禁煙、羽織、表付下駄はゆるさない。盆と正月に一定の仕着せをうけるほかは無給である。十七、八歳で元服して手代に昇進すると本名でよばれ、酒も煙草も許される。手代を十年内外勤めると番頭に昇格、店務統括の任にあたる。二十年勤めあげると資本、別家料、暖簾がわかたれ別家になる。

安田は右の引用に続けて、「このしきたりは、時代とともに改革されつつ進展したが、まだ大正から昭和の初めごろ、特に呉服業界の人事関係には際立つた変化は見られなかつた」と述

べている。「名前も本名でよばれず、亀次郎は亀吉どん、長助は長吉どんになる」、「手代に昇進すると本名でよばれ」という「しきたり」が、実際にどのくらい浸透し、どういう消長を示すかは、地域や職種や規模によっても違うだろう。現に著者も「丈吉どん」ではなく、「丈どん」と呼ばれている。しかし、「名前も本名でよばれず、亀次郎は亀吉どん、長助は長吉どんになる」、「手代に昇進すると本名でよばれ」という「しきたり」が意識されるような世界では、「仙吉」も任意につけられた「本名」などではなく、「亀次郎は亀吉どん、長助は長吉どんになる」「しきたり」に即して用意周到に選ばれた「小僧」の名と見えてくるのではないだろうか。安田はその著書を通じて、そうした「しきたり」が「大正から昭和の初めごろ」までは生きていたことを記している。「しきたり」が意識されるような世界とは、その「しきたり」の内実については具体的に知らないような一般の人々の意識においても、その「しきたり」によって生きる人々が分節化される日常世界ということである。そこは「小僧」が「小僧」として生きている世界であり、「小僧」が「小僧」として見られる世界である。

今和次郎と吉田謙吉による『モデルノロヂオ・考現学』（春陽堂、昭5・7）は、観察対象としての当時の「現在」や「風俗」に関する情報もさることながら、その対象を選定し分節化するまなざしの性格を知る上でも興味深い。同書の報告のひとつに今和次郎の「本所深川貧民窟附近風俗採集」がある。その報告の一環として今は、「本所と深川とにまたがってゐる中央の南

北の大道路」で調べた「通行者の身分構成」を「図表」として紹介している。いま注意したいのは、その結果や分析そのものではなく、「身分構成」を調べるとき「身分」の設定の仕方である。通行者として多かつた順に記すと、それは「職人、人夫、小僧、お神さん、商人、子供、勤人、娘、老人、女中」となる。また、その結果を踏まえて今は「山の手通りの一大チャンピオンたる青山通り」でも同じ調査を行っているが、そのときの「身分構成」は「紳士、奥さん、上さん、学生、女学生、娘さん、子供、老人、女中、職人、人夫、商人、小僧」となる。

「商人」という区分は、図を見ると、前掛けに下駄履きで烏打帽をかぶった姿で描かれており、その図が実状を反映しているとすれば、「小僧」の出世した姿、すなわち「手代」や「番頭」が「商人」として括られていると思われる。同書を通じて、こうした区分が一貫するわけではない。しかし、『モデルノロヂオ・考現学』が、同時代のあたりまえの風景や日常をあらためて観察の対象として意識し直す試みであったことを考えるなら、「小僧」という身分を「商人」でも「子供」でも「勤人」でもない、そして、「紳士、奥さん、上さん、学生、女学生、娘さん、子供、老人、女中、職人、人夫、商人」などと同じように自然に区分するまなざしがあったことをうかがわせる「モデルノロヂオ」になっている。それは「小僧」が「小僧」として生きていた世界の存在をうかがわせるだろう。「小僧の神様」の「小僧」を子供ないしは少年として読む論は少なくない。たとえば志賀文学における「子ども」を通観し、その重要性を指

摘する宮越勉「志賀直哉の子ども」(国文学)平14・4は、「小僧の神様」について「大人と子どものあわいにある、けなげで愛すべき少年像がクローズアップされてくる」と述べる。紙幅の制限がある中で多くの小説に言及する論全体の枠組を考えると、右のコメントに代表させるのは不親切かもしれないが、短いコメントゆえに「小僧」への一般的な見方が示されているとも言えよう。しかし、「小僧」を「子ども」から「大人」に移行する過程の一段階として捉え、「少年」といった分節化をほどこすとき、「小僧」のニュアンスというより、「小僧」を「小僧」として分節化するまなざしは決定的に見失われるのではないか。

先に、仙吉という名との対応関係を見おく必要があるのはAのみかと問うたのも、「しきたり」や「小僧」のニュアンスと関わる。第一章の会話の場面は、「帳場格子」の「番頭」が「若い番頭」に向かつて、「おい、幸さん。そろく、お前の好きな鮪の脂身が食べられる頃だネ」と話しかけることではじまる。A、Bの記号や「興兵衛」という屋号兼用の名前を除けば、「幸さん」という名は仙吉とともに記された例外的な固有名である。それも右の箇所のみなのだから、なくても済まされそうである。しかし「幸さん」という名が記されることで、「昇進すると本名でよばれ」という「しきたり」を通じて「仙吉」という呼称との階層的対比が暗示されるのだとすれば、やはり一定の意義を担って用意されたと考えられるであろう。もちろん

ん「幸さん」も本名の省略に違いないが、先に引いた安田は「今ならば課長、係長、そして私の係」という関係について、当時は「当然そんな肩書きはない」ので、「上の二名が」さんづけで、もう一人と私が「どん」であったとも述べている。いづれにせよ、「仙吉」と「幸さん」という呼称に、商店の人間関係を計量する秤が働いているのはまちがいない。「幸さん」の名に志賀の行きつけの鮪屋の名前(幸ずし)が意識されているとしても、その使用が「幸さん」という人物の固有性を強調する意義がないのと同様に、「仙吉」という固有名も、その名を与えることで固有性の輪郭を強調するためというより、店の「しきたり」の中で生きている「一人の小僧」の同義語めく名として機能している。先行論でも評価や解釈が問題になる小説大尾の付記が、「仙吉」ではなく「小僧」になっているのは、視点の問題とは別に、両者がそもそも同義的な関係にあったからではあるまいか。

作者は此処で筆を擱く事にする。実は小僧が「あの客」の本体を確かめた要求から、番頭に番地と名前を教へて貰つて其処を尋ねて行く事を書かうと思つた。小僧は其処へ行つて見た。所が、其番地には人の住ひがなくて、小さい稲荷の祠があつた。小僧は吃驚した。——とかう云ふ風に書かうと思つた。然しさう書く事は小僧に対し少し残酷な気がして来た。それ故作者は前の所で擱筆する事にした。

作者が目撃したのは「小僧」だが、その体験をもとに構想したのは「仙吉」の話か、「小僧」の話か。作者が「残酷」に思

つたのは「仙吉」に対してか、「小僧」に対してか。こういう問いが有効でない位相で「仙吉」の名が選ばれたのではなからうか。右の付記は、それを傍証するように、「小僧」とのみあって「仙吉」と記さない。こう書くと、それなら「仙吉」という固有名そのものが不要ではないかという反論が予想されるが、そうすると文章上しっくりこない部分が生じてしまう。たとえば前引の小説冒頭の一文、あるいは第五章冒頭に続く一文「そして或日彼は偶然神田の仙吉の居る店へやつて来た。」などである。後者を「彼は偶然神田の小僧の居る店へやつて来た」とすると、文脈から推測できるとはいえ、「神田」中の店がなくてはまるようで具合が悪い。ほかの小僧ではない一人の小僧として弁別する必要はあるが、固有名が担うのは仙吉という個性や自我ではあるまい。「仙吉の神様」が、そのまま「小僧の神様」となつてかまわない位相で「仙吉」と名づけられている。なお「小僧」と「仙吉」を併用することで生じる効果もあるが、先行論もあり、本稿では言及しない。

その呼称にすでに一種の「しきたり」または「小僧」の要素が織り込まれている「仙吉」の名で始まった第一章は、鮪の話題を提供する枕というのみならず、小僧の生活世界の「しきたり」を描きこんでいる。「一人の客もない」店の「帳場格子の中」にいる年配の「番頭」は、「巻煙草をふかして」いる。その何げない風景の背後にも、「手代に昇進すると本名でよばれ、酒も煙草も許される」という「しきたり」がある。「若い番頭」は「火鉢の傍で新聞を読んで」いるが、「小僧の仙吉」はその

「若い番頭からは少し退つた然るべき位置に、前掛の下に両手を入れて、行儀よく坐つて」いななければならない。「帳場格子の中」「火鉢」「若い番頭からは少し退つた然るべき位置」という彼らがいる場所は、そのまま店の中の「然るべき位置」や「身分」を伝えている。言うならば、彼らもまた「秤」の上に乗っており、彼ら自身がめいめいの重さがきつちりと決まつた「分銅」なのである。番頭たちの話を聞いた仙吉は、「早く自分も番頭になつて、そんな通らしい口をききながら、勝手にさう云ふ家の暖簾をくぐる身分になりたいものだ」と思うが、「小僧の仙吉」でしかない彼は、連想してさえ「口の中に溜つて来る唾を、音のしないやうに用心しく、飲み込」まなければならぬ。それが「身分」にふさわしい身のかまえである。先に引用した『丁稚の知恵袋』の著者は、先輩の「元どん」から「そば」を「御馳走」されたときのことを次のように記している。

入れ替わりに弥吉どんが入つてきた。ちらりと私を見て、新入りのくせに生意気なという目つきをしたが、元どんと一緒になので何もいわれなかつたのだろう。もし私一人であつたら、後でお説教があるに違いないと思つた。

そばを食うことが「お説教」ものであるなら、鮪もまた同じ、まして「再び其処へ御馳走になりに行く」(第十章)ことは「恐ろしかつた」(同)に違いなく、それでこそ「小僧」である。仙吉の「早く番頭になつて」という願いにもかかわらず、「鮪屋の暖簾」を潜る「身分」になるまで一足飛びというわけにはいかない。「悲しい時、苦しい時」(第十章)を経て「小さい子供

が段々大きくなつて行く」ように大きくなるしかないのである。なお、大正五年に長女慧子を亡くし、小説発表の約半年前に長男直康を亡くした志賀にとつて「小さい子供が段々大きくなつて行く」ことは切実な願いでもあつただろう。この小説に寄せる作者の愛着の一因は、そうした成長を見守る目が「子供」ならぬ「小僧」にもそそがれているからではなからうか。

小僧が「大きくなつて行く」商いの世界とそこでの「秤」の問題は、番頭たちが語る鮪屋の話とも関つてゐる。それは「あの家のを食つちやア、此辺のは食へない」という品評であり、「與兵衛の息子が松屋の近所に店を出した」、「其処は旨いんですか」、「さう云ふ評判だ」、「矢張り與兵衛ですか」、「いや、何とか云つた。何屋とか云つたよ。聴いたが忘れた」という「名代の店」の暖簾分けをめぐる話である。なお、小説には「紺の大分はげ落ちた暖簾」(第一章、「暖簾をくぐる身分」(同)、「鮪屋の暖簾を見ながら、其暖簾を勢よく分けて入つて行く番頭達の様子」(第二章)、「同じ名の暖簾を掛けた鮪屋」(同)、「兎に角暖簾を潜つた」(第三章)、「少時暖簾を潜つた儘」(同)、「勇気を振るひ起して暖簾の外へ出て行つた」(同)と第三章までに限つて暖簾が描きこまれるが、暖簾は小僧の最終的な目標地点とも言つべく、また、それ自身が店の重量を示す一種の「秤」であることは言うまでもない。谷峯蔵『暖簾考』(日本書籍株式会社、昭54・5)は、山崎豊子「暖簾」の一節を引き、「暖簾の価値」は「それを活かせる人間の価値」と述べている。

暖簾の信用と重みによつて、人のできない苦勞も出来、人の出来ないりつぱなことも出来た人間だけが、暖簾を活かして行けるのだつた。(傍点論者)

小説の最終章に「悲しい時、苦しい時」の句があるが、それは右の引用とも通じるような「苦勞」を経て、「客」という「神様」に支えられつつ「暖簾の信用と重みによつて」成長する姿を予見させる。

さて、番頭たちの言う「あの家」が「京橋の幸ずし」であり、「何屋」が「花屋」であることは「鮪新聞への返事」(東京鮪商組合新報)大15・1で作者が語るところであるが、小説では「幸ずし」や「花屋」といつた具体的な名前は省いていて、「色々さう云ふ名代の店」の代表として「與兵衛」という名前のみを記している。そのため、「色々」の「名代の店」に通じていない読者にとつて、仙吉が飛び込む「同じ名の暖簾を掛けた鮪屋」にも「與兵衛」という暖簾が下がっているかのような誤解を与えかねない文章になつてゐる。たとえば関川夏央『小僧の神様』における経済的側面(『文学界』平10・5)が「与兵衛」というのが京橋の店の屋号かどうかはわからないが「云々と記すのも、そのように読んででも可能な文章になつてゐるためである。それは誤解であるが、誤解の上で読んで「暖簾」が「名代の店」のシンボルであることを押さえれば大過ないような文脈に仕上がつてゐる。

與兵衛については、鮪の歴史を語るような本が握り鮪の創始として必ず言及する店なので、くたくだしい用例の列挙はやめ

て、いつそ嵐山光三郎『寿司問答 江戸前の真髓』(ちくま文庫)の一節を引こう。「すし與兵衛」という店を取材した嵐山は次のように述べる。

「與兵衛」と店名をつけたのは、江戸前寿司屋「與兵衛」にちなみ、かの華屋與兵衛は文化七年(一八一〇年)に繁盛した江戸初の店として、つとに有名である。「鯛ひらめい」も風味は與兵衛すし、買手は店に待つて折詰「こみあひて待ちくたびれる與兵衛、客ももろとも手を握りけり」と詠まれている。江戸時代の與兵衛店があつた兩國近くに店を開いたのはそのためである。歴史上の名店「與兵衛」にちなんでの命名は、新入幕力士が「雷電」と名乗るようなもので、主人の意気込みは感じられるが、はつきり言つて生意気である。凶々しいにも程がある。

「新入幕力士」から「雷電」までの鮪屋の世界もまた、小僧から番頭までを律する「秤」によつて支えられ計量される世界である。そのような「秤」の世界にあつては、「生意気」「凶々しい」というのも一方的な貶詞などではなく、小僧への「新入りのくせに生意気な」という「お説教」と同様の「段々大きくなつて行く」ための教育的言辭でもあるだろう。小説の第三章には、「海苔巻」がないと知つた小僧が「こんな事は初めてぢやないと云ふやうに」「手を延ばし」「其手をひく時、妙に躊躇した」瞬間、「ジロく」と小僧を見て居た「鮪屋の主」が「一つ六錢だよ」と声をかけ、それを聞いた小僧が「黙つて其鮪を又台の上へ置いた」のを見て、「一度持つたのを置いちやあ、

仕様がねえな」と言う場面があるが、こうした「主」の対応などにも、同じ「秤」や「しきたり」の世界を生きる者の教育が示されているのではなからうか。嵐山は、明治十八年創業の銀座「寿司幸」本店の二代目杉山宗吉が書いた『すしの思い出』(養徳社、昭43・7)を引いて、「十二歳のときに別の寿司店に修業奉公に出されたことが書かれている。数え年二十一歳になるまでの年季奉公で、なるほど、店を継ぐというのは並大抵の覚悟ではできないとおそれいふ」と書いている。「一度持つたのを置いちやあ、仕様がねえな」と言う「肥つた鮪屋の主」は、あるいは「可哀想」と思うことはあつても、「どうかしてやりたい」とか「御馳走してや」ろうとは、けつして思わないだろう。それが「奉公」の「修業」であり、「小僧」自身のためであることを身をもつて知つてゐるからである。こう書くと、小僧が御馳走してもらふ「與兵衛の息子」の店の扱いが対照的であるという非難もあろうが、ここでは小僧は小僧以前に客である。ただ、その店でも客の小僧が「秤」の上にいることは同じなので、「若い品のいいかみさん」は、小僧が「三人前の鮪を平げ」るときに「故と障子を締め切つて行つてくれ」る。

「鮪屋の主」が自分の生きる世界の「秤」で「小僧」を計量するのに対し、「若い貴族院議員のA」は多分に違ふ「秤」の世界を生きている。Aが、それまで「立食ひ」をやつたことのない人物として登場し、「屋台の鮪屋」の前でも「一寸躊躇し」、「思ひ切つて兎に角暖簾を潜つた」と表現される点なども、両者の「秤」の違いを示すだろう。そのAが「御馳走」をしてや

った後の気持は先に引いた。その6には「丁度それは人知れず悪い事をした後の気持に似通つて居る」とある。小僧が生きる世界の「秤」を尺度にすれば、Aの行為はより端的に「それは人知れず悪い事をした」となるだろう。そばを食う「小僧」が「お説教」されるように、一件が知れば、秤屋の番頭は仙吉を「人知れず悪い事をした」と責めるに違いない。なにより小僧に「人知れず悪い事をした」との自覚があればこそ、「主人夫婦に再三云はれたに拘らず再び其処へ御馳走になりに行く気はしなかつた。さう附け上る事は恐ろしかつた」という気持を抱くのである。そのような気持は、仙吉に限らず、年季奉公の小僧一般のものであろう。

「奉公」を一方的な搾取や奴隷制に比すような方向ではなく、それが世の中に出るための「修業」として成立しており、その中で自身を主体化していくようなものとして「小僧」を捉え、その「小僧」が「小さい子供が段々大きくなつて行く」ように見通されるとすれば、第三章の「小僧」の姿を、たんに惨めで可哀想なそれとしてのみ判定するのは、いかにもAのままざしに同調した見方と言わざるをえない。ちなみに嵐山のあげた『すしの思い出』の著者・杉山宗吉は、時に「ピンタ」もとぶ修業奉公について、それは「一人前」に「なれるよう段々に仕込んでもらう」「生きた社会学」であり、「身をもつて学ぶ」「体当たりの勉強」であり、「その労苦を忍びつつ業を習つたり覚えたり、あるいは、年期を勤め上げるところに、修業奉公としての価値がある」と述べ、続いて次のように言う。

現在のように文化や学問も進み、また、階級意識も強くなつた時代からみると、すべてが封建的で野蠻のようにも考えられると思いますが、それだけに体験から受ける教えには、魂のこもつたとういものがあります。

右のようなまなざしを「鮎屋の主」が共有しているとすれば、作者は「鮎屋の主」のふるまいを通して、Aのような見方の一面性を示唆していたとも言えなくもない。また、第十章に「悲しい時、苦しい時」という句を書きこんでいる以上、作者は、第三章と同じような惨めで可哀想な瞬間が、その後も「小僧」を襲つたことを見通している。その具体的には描かれない「悲しい時、苦しい時」は、仙吉ひとりの「悲し」さ「苦し」さというのではなく、「小僧」一般がなめる体験を予想させるだろう。しかし、そうした体験は、たんに惨めで可哀想なそれというだけなのか。そうではなく、まさに、そうした惨めさや悲哀を通じてこそ「小僧」は「段々大きくなつて行く」、「一人前」に「なれるように段々に仕込んでもらう」から、仙吉というより「小僧」は奉公を続けるのだろう。先に引用した安田は、企業間の名刺交換のような場面でのやりとりを次のように記している。

会話がとだえると、「学校はどちらです？」とくる。私の場合だと「丁稚上りの無学者です」と即座に答える。この場合「間」をおかないようにしている。少しでも時間の空白があつたり、遠慮がちに答えると、見下した素振りをするのがあるからだ。それはしかたないが、バツの悪そう

な顔をする人もいるからだ。こういう人は別段悪気はない。もし同じ学校なら話題も深くなるからとの好意的意図があることだろう。

だいたい、この二つのタイプに分かれている。私の身分がハッキリすると、相手は気取りがとれてザックバラになる。

今度は、こっちが相手のインテリ尺度ほどの程度かを測る側になる。(傍点論者)

たとえば、右の引用にあるのも、安田に限った観察眼などではあるまい。そこには、かつて「丁稚」(小僧)であったことの惨めさよりも、むしろ、そこから自身を鍛きあげてきたことによつて「相手のインテリ尺度ほどの程度かを測る側」の目を養い得た自負、「生きた社会学」者の自負のようなものがある。屋台の鮪屋での小僧の悲惨とAによる恩恵は、ともども、「小僧」が成長する要素、言うなれば、「小僧」の浮かぶ瀬であり、「小僧の神様」だったのであるまいか。この小説に寄せる作者のストレートな「愛着」も、「悲しい時、苦しい時」をくぐりぬけていく「小僧」へのまなざしと関わっているように思われる。

最後に、小説の後半とくにAの気持を叙す部分と「秤」の関わりについて付言しておきたい。小説には「人を喜ばす事は悪い事ではない」という一見普遍的にも見える判断が記されていた。しかし、それも常に成り立つわけではない。Aの住む世界

の「秤」では成り立つても、同じことが、小僧が住む世界の「秤」では「悪い事」になつてしまふ。Aは「此変に淋しい、いやな気持は。何故だらう。何から来るのだらう」と自問自答し、「丁度それは人知れず悪い事をした後の気持に似通つて居る」と感じる。それは彼の感じや気持としてしか記されていないが、すでに述べたように、「小僧」の住む側、「インテリ尺度ほどの程度かを測る側」に立てば、Aはまさに「人知れず悪い事をした後」である。ただし、その「人知れず」にはA自身が含まれる。

Aは「満足していい筈」「喜びを感じていいわけ」にもかかわらず、「変に淋しい、いやな気持」を感じ、「何故だらう。何から来るのだらう」と問うが、それは「秤」の違いから来ている。

こうした「秤」の違いがもたらす問題は、小僧のそれとしても描かれており、それは次のような「不思議」として現れる。

仙吉は不思議でたまらなくなつた。番頭達が其鮪屋の噂をするやうに、AやBもそんな噂をする事は仙吉の頭では想像出来なかつた。

その結果、仙吉は「あの客」のことを「神様」「仙人」「お稲荷様」と考えることになるが、「神様」「仙人」「お稲荷様」をもちますのは「AやBもそんな噂をする事」が「想像出来ない仙吉の「秤」である。つまり、「変に淋しい、いやな気持」が「何故だらう。何から来るのだらう」と自問するAの不安も、「あの客」について「何故だらう」「どうして知つたらう？」という小僧の「不思議」も、「秤」の違いという同じ構造に由来する。

あるいは仙吉が御馳走になった鮭屋の「かみさん」がAを評して言う「粹な人」という判定も、同じように「秤」の問題として捉えることができる。「粹な人」のふるまいが、Aの「秤」では「冷汗もの」の行為でしかなく、したがって「逃げるやうに急ぎ足で」退散しなければならぬ。しかし、その「逃げるやう」な「急ぎ足で」も「かみさん」には「粹な人」に見えたのではないか。さらに言えば、Aも仙吉も、それぞれ「かみさん」のいる鮭屋から足が遠のく点では同じだが、その理由は違っている。しかし、その理由によらず、「かみさん」には、それすらも「粹」に見えたのではあるまいか。

こうして、「秤」の問題を意識すると、末尾の付記に言う当初の構想が「残酷」なのは、そのような結末では種々の「秤」が存在する世界に対して小僧の盲目が決定的になるからだろう。それは「大きいから小さいのまで荷物秤が順に並んである」秤屋の店員としては失格である。また、その「残酷」さは、「俺のやうな気の小さい人間は全く軽々しくそんな事をするものぢあ、ないよ」と語るAではなく、たとえば「冷汗もの」を実行して「満足し」「喜びを感じて」いるやうなAを描いたと

きのそれとも通じている。小僧が「残酷」さから救われているやうに、Aも「淋しい、いやな気持」を感じることによって救われている。このように見てくると、「はかり屋の小僧」という設定は、第三章以前のみに関わる任意の設定などではなく、やはり小説全体の鍵ないしは根として働く不可欠で必然の設定だったと言うべきであろう。考えてみれば、第三章の「小僧」を惨めで可哀想とのみ見るのも、我々の「秤」ではないか。そして、そのような「秤」が客観的な「秤」に見えるのは、我々の世界から「小僧」がいなくなつたからかも知れない。もちろん、作者は「段々大きくなつて行く」「小僧」を明示しているわけでもないのに、この小説の読みの場では、読者の「秤」が量られることになる。その点でも、「はかり屋の小僧」はこの小説にとつて、まことにふさわしい。我々もAの細君と同様につぶやくべきであろうか。

「秤どうも恐れ入りました」。